

---

# 怪盗快音が本当の事を口にしたとき

たけま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

### 【著者名】

Z8887D

### 【作者名】 たけま

たけま

### 【あらすじ】

初めての連載です。おかしなてんがある場合感想の場を借りておしゃて下さい。

第一話快晴が本日の事を口ひつたとせ（前書き）

初めての出来事をお読みトヤ。

## 第1話快音が本当の事を口ひしたとき

快音としての予告状を警視庁におくり私はあるビルの屋上にいる。

「今回も怪盗としか書いて無いけど警部は見破れるかな?」ちなみに今日の狙いはブルーサファイアです。

「まあ行くか」

「居たぞ、奴だ怪盗キッドを捕まえる。」いつもと違つぶにんきにすぐに対応した。

「バレバレですよ。警部私がキッドでは無い事」存じでしょ?「う…」

「何故なら、今日の夜中1-2時にキッドが現われるから早めに終わらしたいのでしょうか?」「まあ、心配無用ですよブルーサファイアはもう既に私の手の中に…」

「バカなちゃんと検査した筈だ。」

「櫻井探偵の姿を貸して貰つたんですけど…元から似てるからばれて無かつた見たいですね。」

「ところで、警部お時間は大丈夫ですか?」

「ああ…」うるさ…

「今、11時ですよ。」

「くつそ次こそ」よし帰つたやつぱりパンダラではないのでお返しする

「さあ観客として行くか。」キッドは狙いの宝石を盗みあるビルの屋上に降り立つた、そのとき黒ずくめの奴が5人出て来た…!

「これは貴方方が求める宝石ではないですよ。」

「じゃ、死んで貰う…」5つの銃口がキッドに向く私はトランプ銃を出し犯人に向けて2発打つ屋上に降り立ち3人を閃光のなかで素早く氣絶させ敵は2人に減つた、

「なんで此所に居る。」

「キッド素が出てるよ。」

「あ、」

「黒ずくめの下つ端君ボスのジンに言つといへパンドリせ世界中何処を探しても見つからぬとね…」キッドの方に振り返ると

「どうゆう事だよすれ…」

「違う所で教えてあげる。此所から逃げるわよ香凜の声で警察に電話したし。」私達はとある倉庫に来ていた。

「えつとまざなにから聞きたい？」

「パンドリの事だ…」

「OK…まず私はある人からパンドリの本当のありかとじづやつて不老不死の薬にするかを…これでOK?」

「次に、ある人について」

「ある人とは貴方の父親黒羽盜一さんよ…黒羽快斗君?」

「なんで、」

「だから、キッドが教えてくれたの」

「それぐらい分かる、何故お前が親父を知つてゐるか聞きたいんだ」

「ああー私ね盜一さんが殺される瞬間見ちゃたの…助けれなかつた、私が盜一さんに近寄るとさつきの事を教えてくれたの…本当に…ごめんなさい…私が…私が…殺したも同然ね」私は涙で顔がクシャクシャになりそうだった。「次に何故お前が組織を知つてゐるか…」盜一さんにことに触れずに次に行くキッド

「私は一時海原七海として黒ずくめの一員だつたより多くのパンドラの情報を得るためにね。そしてそこで、あの方と出会つてコナン君の正体を知つた。」

「お前バカか」

「賢いのが良いわけじゃないでしょ?」

「このはそのときがくるまでお互い黙つてゐる事?分かつた?」

「ああ、探偵君にも言わねえよ」そのときがくるのはそう遠く無い事を知つてゐるのは、作戦を建ててゐるあの人だけ…

そんな事私達が知る筈も無い。「次に何故お前が組織を知つてゐるか…」盜一さんにことに触れずに次に行くキッド

「私は一時海原七海として黒ずくめの一員だったようやくのパンドラの情報を得るためにね。そしてそこで、あの方と出合って君の正体を知った。」

「お前バカか

「賢いのが良いわけじゃないでしょ?」

「この事はそのときがくるまでお互い黙つていい事? 分かった?」

「ああ、探偵君にも言わねえよ」そのときがくるのはもう遠く無い事を知つてるのは、作戦を建ててあるの人だけ…  
そんな事私達が知る筈も無い。

(END)

## 第1話快音が本当の事を口ひしたとき（後書き）

快斗（以下快）「何故かこの場に呼ばれた快斗と」快音（以下音）  
「快音で～す」快「なんで、俺にずっと黙ってたんだよ。」音「ほ  
ら盗一さんにその時がくるまでお互い黙つていりてつ約束したし、  
教えたる快斗ショック受けるでしょ？…それによまだまだ続くよこの  
秘密」快「言えよ…」音「今此所で言つたら読者さんに怒れるよ。」  
では、2話でまた会いましょう。

## 手を組む盗賊と探偵（前書き）

後書きには快斗と快音が出ている」と気付きました。

## 手を組む怪盗と探偵

私は黒羽邸に向って走っている何故なら組織の情報が紫稜から入ったからだ（ピー・ポーン…ガチャ）

「あの櫻井香凜ですけど…ハアハア 快斗君居ますか？」

「居るけど…」

「良かつた…快斗君が事件に関係あるかも知れません。ハアハア…工藤君に似た人が居たてつ聞いたのでもしかしてと思い快斗君にお聞きしたいのですがかまいませんか？」

「ええ、快斗ー香凜さんが手伝つて欲しいらしいわよー」

「あーすぐ行くから待つてくれ。」数分後

「待たせな」

「では、少し快斗君を貸して貰います。」

「んで、本当はなんだよ、」

「組織のアジトが掴めたの」

「だから、探偵事務処に言つてるのね」

「うん」（ウンウン）

「はーい」

「あ、蘭さんコナン君居ます？」

「香凜ちゃんに快斗君どうしたの」

「コナン君と公園に行く約束したんだけど…」

「僕は此所だよ香凜姉ちゃんに快斗兄ちゃん…」

「あー、コナン君

「じゃあ、行くぞ」

「あー快斗」

「蘭さん昼には帰ってきます。」

「じあーねー蘭姉ちゃん」公園に到着

「んで、何なんだよ2人して」

「まあまあ博士家に行ってから」博士家についたら

「遅いわー快斗に工藤に香凜」

「すまんなー平次君快斗の母さん説得するのに時間掛かつてん。」

「なんで服部が居るんだー」

「おいボウズ早くこい」

「まず、仮定のために私達の自己紹介をするね。…まず私から…私の正体は…」快音の格好をする

「怪盗快音よ」快斗はキッドに変わる

「怪盗キッドだ」元に戻り

「分かつた?」一人は啞然として居る

「今日此所に来たのは組織のアジトについての情報が掴めたから」

「ほ、ほんまかいなー」コナン君は探偵モードに

「だから手を組んで欲しいんです。本当の事はそのときが来たら教えるから」

## 手を組む怪盗と探偵（後書き）

快「次になつてんじやんしかも正体ばらしてるし」音「後々関係してくるのよ」快「本当か？」音「作者のたけま先生が言つてたよ。」  
快音「まあ、感想アドバイス御待ちして居ます。」

### 第3話パンドラが現われた

「手を組むだと？」  
「はい、貴方方の推理力と私達の変装術を使ってね」  
「嫌だね。」  
「まあ、話を最後まで聞いて」快斗が後をつぐ  
「まず、俺らが組織に潜入する。そして、アポトシキンの情報を得  
る。」  
「そして、ボスの所に行く」  
「…分かつたよでも、櫻井香凜と黒羽快斗としてだ。」  
「くれぐれも無理すんなよ。」  
「ほんまやで」  
「ええ、探偵バッヂを着けて置くわ」  
「ほんなら、作戦開始やな」  
「ええ」  
「ああ」  
「ああ」  
「そだな」抗して、探偵と怪盗は手を組む事に成功した。「コナン  
君はFBIに連絡して協力して貰うよつにお願いして下さい。」  
「ああ」  
「平次君はFBIと協力して私達の情報を正確に聞きまとめて、そ  
れを、コナン君に送る。」  
「なんや、俺だけのけもんかいな。…そんなことゆるさへんで…！」  
「貴方は、黒に染まつては駄目なの…」私と快斗がはもる。  
「だから、貴方に協力をして貰いたく無かつたんだけど…快斗が居  
た方が良いてつ言つから…頼んだの…」  
「あー分かつたわ涙目になるな。」  
「じゃ、最後の大勝負の始まりだ」3日後快斗と私は一人に隠して  
怪盗キッドと快音としてアジトの屋上に降り立つた。  
「さあ…ショーの始まりね」

「シヨーはやめろ。」

「『めん出来るだけキッドに化けてる事あの一人にばれないようこ  
元ひ

ね。」

「分かつて居ますよお嬢さん…」「じゃ、行くわよ。」何故怪盗の  
格好で行くかつて？快斗がキッドとして盗一さんの敵を打ちたいて  
つ言ひから…私も快音として盗一さんの敵打ちを手伝つて上げたい  
なてつ思つてね。

「早くこい」

「うん」よいよ組織との対決の始まり…私達は気配を消し地下に向つ  
「此所まで誰も出で来ないのは、おかしいわ…まさか…もう氣付い  
ているんじや…平次君組織は動いてる？」

「まだや、うんともすんともいわへんは…」

「そう今地下についたわ分かりしだいまた連絡する。」快斗と別れ  
て部屋を探す。

「ん…アポトシキンあつた…平次君」

「なんや…」

「あつたわ薬の情報とアポトシキンの完成版が…」

「ほんまかいなー」

「声が大きい」

「すまん」

「鳩に持つて行かすから」

「快斗ー」

「んだよ」

「さあ、ボスの所に行くわよ

「あつたのか薬？」

「ええ、あ、確か此所がボスのくや」（ノンノン）  
（ヒロシヒロシ）

「海原七海です。」

「入りなさい」（ガチャヤ）

「さてとまず快斗無線を切つて」

「ああ」私も探偵バツチのスイッチを切る

「さあ、」じりじりに向いて下せ。」その頃平次達はくつそ、通信が切れよつた。」

「なんだと…服部…探偵バツチの電波を探してくれ。」

「ああーあつたで、工藤、香凜のバツチの電波が…」

「その情報この眼鏡に送れるか?」

「10分ぐらい掛かるけどできるで、」

「頼んだ」一方、香凜達は

「黒の組織の黒幕さん工藤優作さんと櫻井紫稜さん?」快斗は我を失いそうになりながら、私に聞く

「どう言つ事だよ。快音…」

「黒幕は…私達の…身じかに居た…のよ…。」

「さあ…紫稜さんと優作さん屋上で話をしましょつ。」

「じゃあ、いくかね。」屋上についたこのコナン君達はと言つと

「出来たで、工藤ー」

「おいあいつら、屋上にいる。」

「はあ?まあええわはよ行くで…」

「ああ「屋上の私達は

「まず私の正体から快斗は言わないで良いよ…これは…私の問題だから…」私は快音から香凜に戻り続ける

「父ちゃんがボスだつたなんて信じられ無いよ…」

「香凜…お前が快音だつたなんて…」(ガチャ)

「コナン君来や駄目ーそれ以上扉を開けると言つなら私は貴方の敵になつてしまつ」

「分かつたよ此所で待つてゐるその代わり服部は良いだらつへ。」

「ええ、」(キイー)

「なんで、あんたが此所におんねんや…」

「この人達が」快斗が代わり言つてくれた

「黒の組織の黒幕だ」

「う、嘘や信じひんぞ。」

「平次君…昔新一君に言われてたじやない…不可能物を除外して行

つて余つた物がどれだけ信じられ無くて…それが…眞実だ…てつ  
「そやけどなんで香凜は驚いて無いねんな…」

「私はスパイとして一時黒の組織の仲間だった、その時全てを知つ  
てしまつた。そして、この事はその時がくるまでお互ひ黙つている  
事にして私を組織から逃がしてくれた」

「まさか、君があの海原七海だつたなんてね」優作さんが口をひら  
いた後ろから扉が開く音が聞こえる

「んで…なんで、父さんが此所にいるんだよ…」

「新一君貴方にはもうひとつ裏切りがあります。…「コードネームシ  
ヤクソン…」私は平次君の方に向き

「服…部…平…次」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ」私は震えているコナンを抱き抱え快斗に近付  
いて組織の方に向きこゝう言つた

「パンドラは世界中何処を探しても見つからない。何故なら、パ  
ンドラは此所にあるから」と言つて私は胸を指さす、  
「心かいなそんなの這つたりやろ」と言つて木刀を構えた平次君が  
掛かつてくる、出来るだけトランプ銃は使いたく無いと思つて  
いると快斗がどこから出したか分からぬスピードで木刀をくるた。

「ふん、武器を持つて一緒や」私は攻撃を避ける

「ちつ、うわかまる見たいなやぢやなあ。」

「遅いてつ平次君上や上」と言い死なない程度に軽く氣絶させる  
「ごめんねちよとだけ寝て下さい。」

「さあ、パンドラを出して貰おつか?」こいつの命が奪われたく無か  
つたらな。」

「コナン君」快斗は?周りを見渡すと快斗は眠らせている。5つの  
銃口がコナン君に向く

「分かりました。ですが、不老不死の薬にするためにどうすればよ  
いかは私は知りませんよ」私は呪文を唱える

「ある人の心にある禁断の箱開かれし時ある人は記憶を失うであろ  
う。…開けある人の心にある禁断の箱!」すると私の胸からパン

ドラが出来た

「禁断の箱薬にするときある人の涙が必要となるしかし、禁断の箱薬にする前に心に戻したときある人記憶はうしわれないだろう。ある人の記憶戻らんときは、白き仲間が救つてくれるであろう。…開け禁断の箱！！」

「やつたぞ、」私は意識が朦朧するなか快斗に近付いて耳元で呟いた。

「その…涙…とは…私の…涙…よ…忘れないで…よ…」パタン  
「香凜…香凜ー」ふと目が覚めると「目が覚めたか？」

「あのすみません…貴方は私の知り合いでですか？」

「ああー自己紹介といふか。俺は江戸川「ナン探偵さ。そして俺＝高校生探偵工藤新一だ」

「俺が黒羽快斗でありあるもうひとつ顔の持ち主だ」

「俺が服部平次探偵や」

「う…」

「「どうした？」」

「思い出した…貴方達が誰のかめパンドラを不老不死の薬にするためにはどうすればよいかも…そして組織のことも…」

「取り返さないとすぐにまた忘れてしまうわパンドラを取り返さないと…」

「「じゃあ、行くか？」」

「ええ、もう泣いてはならないね。」

### 第3話パンドラが現われた（後書き）

快「まさか、探偵君のお父さんと香凜のお父さんが黒幕だったなんて…」音「信じられ無いでしょ。」快「いくら何でも此所まで身じかにいるなんてなー」音「次で終わるかなあ？」てつたけま先生が言つてたけど」快「大丈夫か？たけまのやつ」たけま「快斗～（怒）人を信用しなさい。」たけま「あつ、読者の皆様こんにちわー作者のだけまで。まだまだ文章力がないので不明な点が多いと思います。その時はアドバイス御待ちしてます。」快、音、たけま「よろしくお願い致します。」「

#白毛仲間登場（前書き）

最終話です。

私達は二人（コナン君と平次君）に黙つて、あと、もうひとつあの3人には、黙つてゐるが（コナン君と快斗と平次君）パンドラが心中に無い状態で思い出すと、体にすごい影響がある事、アジトに来てる。屋上の扉を私が開ける

「また、誰も出て来ないな……」

「まさか、もう、逃げたんじゃ……」

「取り敢えず、地下に向つた」 そうね……迷つてばかりじゃ……変わらないもんね。

「ええ、そうね。」 ボスの部屋の扉を開ける

「誰だね？」

「快音です。パンドラを返して下さい。」

「そうか、では、屋上に行くかね？」 快斗が言つ

「さあて、パンドラを返して貰おうか？」 だが、紫稜さんと優作さんが反論する。

「それは、無理な相談だ。」 私が、紫稜さんに聞く

「なんで、ですか？ パンドラが不老不死の薬に出来ないなら、貴方達には、不必要的物でしょ？」 紫稜さんは、ちょっと間起き私に聞く 「誰かの涙が必要になるんだろう？」 私は、黙つて、うなづく、 「誰の涙かは、調べたら、出て来たんだよ……君の涙だと、言う事がね。」 と、優作さんが言う。

「えー……と言いたいけど、普通は、ばれるわね。」 「でも、何があつても、私はそれを、受け止める、だから、私は……泣かないと誓うわ……黒羽盗一の名にかけて。」

「ホー、そいつの命もかける事ができるか？」 紫稜の指が快斗をさす。

「ええ、この人とあと1人の命は、私が命を懸けても守ります。」

次の瞬間、優作さんの手から、閃光弾が投げられる。

「く……」

「快斗……」閃光が消えた時、快斗がいつの間にか捕らえている。

「……」いつの命が奪われたく無かつたら、泣くんだな。」

「くつそ、私のせいで、快斗の命を奪う事だけは、私が、許さない。

「快音、何があつても、絶対に泣くな……」快斗が言つ。すると、快斗は、下つ端数人に殴られている。

「やめて……」

「聞こえんぞ、降参か？」

「やめなさいってつ言つてるの、」私は下つ端を倒しながら、続けて言つ

「私は、貴方達見たいな、負け犬だけには、なりたくない。」

「あんた達だけは、絶対に……許さない……」私の体は限界に近付いていた。

「私達を、君一人で、倒すと言つのかね？」その時屋上の扉が開いた。

「快音は一人じゃないさ、仲間がたくさん居る。」

「コナン君と平次君それに、FBIの皆さん」

「銃を捨てて、パンドラを返して貰おつか？」と秀一さんが言つ。

「悪いが、パンドラは、返せんよ。」

「白き仲間が救つてくれるであろう。」コナン君が言つ

「く……私は、その場に座り込む。

「どうした？快音

「聞いてないのか？パンドラが心に無い状態で思い出すと、体にすごい影響があると……」

「……」などと、本当かそれは、「私は、ジョディ先生の肩借りて立つ。

「私は……約束した……何があつても……それを受け止めると……」

「まだそんな事を言つて居るのか？所詮人間最後には裏切られるのさ」と紫稜が言つ

「そんな事無い……仲間を信じる事……それを忘れなければ、仲間は……」

裏切つたりしない。」すると、優作の銃口がコナン君に向く私はコナン君の前に立つ

「退かんと、撃つぞ、」

「さつき…言つたでしょ？ キッドとあと1人の命は私が…守ると…」

「快音…」とコナン君が言つ

「許さない…貴方達だけは…」私はトランプ銃を優作さんに向ける。

「ホー、私と闘うのかね？」次の瞬間2発の銃声が聞こえる。

「な、何？」と言つて右腕を押さえる優作さん

「快音なんで避けなかつたんだ。」運良く優作の弾は、私の左腕をかすつただけですんだ。

「だつて、私が避けたらキッドに当たつてたし。」その時キッドが止血をしながら、優作さんに言つ

「黒い弾丸は、銀の弾丸には勝てなかつたと言つ事だな。」すると、何処からかパンドラが飛んできた

「はよしまえや快音…俺の気が変わる前に」

「平次君」

「服部…」

「ホー裏切り者が…」一発の銃声…私は、咄嗟に平次君を押す。

「平次君大丈夫？ごめん強く、押しすぎたね。」

「俺は大丈夫や、お前、弾当たつてないんか？」

「うん、間一髪避けたから…」

「裏切り者を庇うとは…」

「貴方達にとつては、裏切り者…かもしれない…だけど…私にとつて平次君も大切な仲間だから…」

「香凜…俺はお前の事一回裏切つたんやで…」

「それでも、仲間には、違ひないでしょ？」

「君には、負けたよパンドラを早く心の中に入れてなさい…」優作はため息をしながら言つた

「優作さん…」私はパンドラを胸に当て言つ

「元に戻り閉まれ禁断の箱」パンドラは私の胸に戻つて行く。

「ぐ…」私が倒れそうになつたのを快斗が止める。そのまま、快斗の肩を借りて、言つ

「貴方は黒にはなりきれなかつた。」優作と紫稜はため息をつきこう言つた

「黒は白き仲間には、勝てなかつたみたいだ。」その後黒の組織は滅亡し、コナン君は、新一に戻り蘭さんと結婚した。

「全て謎は解けた。」

(END)

## #白き仲間登場（後書き）

快「やつと終わったな…！」音「もひ、快斗と一緒に怪盗出来ないんだね。（泣）」快「ああ、泣くな…まだやめると決めた訳じゃないんだ。」音「どう言ひ事？」快「ほらまだオメエと怪盗やってもいいかなって思つて」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8887d/>

---

怪盗快音が本当の事を口にしたとき

2010年10月8日15時20分発行